

# Newsletter

## INSIDE THIS ISSUE

1. 研究発表要旨
2. 講演・シンポジウム

### 【研究発表要旨】

#### A 室 1

### 近代フランスにおける一つの翻訳史観

—— ジャン = ジャック・アンペールをめぐって ——

東京大学(院) 菊田怜央

1868年5月29日、『祖国』*Le Pays*紙にルコント・ド・リール Leconte de Lisle 訳『イリアス』*L'Iliade* (1866)の書評が掲載された。刊行から1年半後に出版されたこの小文は、修辞学教授アンリ = ガブリエル・オベルタン Henri-Gabriel Aubertin (1809-??)によるものであるが、実のところ、書評というよりも翻訳にまつわる歴史記述となっている。

オベルタンの翻訳史観において中心を占めているのは、一般に比較文学の先駆者とされるジャン = ジャック・アンペール Jean-Jacques Ampère (1800-64)である。オベルタンは、アンペールこそが「真の翻訳方法」をもたらしたと記しており、シャトーブリアン

Chateaubriand (1768-1848) やルコント・ド・リールをその系譜に位置づけている。

しかしながら翻訳史研究においては、シャトーブリアン、ルコント・ド・リールの翻訳と対照的に、アンペールはその名が挙げられることすらほとんどない。そうであれば、オベルタンによるアンペール翻訳の評価はどのように理解すればよいのだろうか。

そこで本発表では、この書評を足がかりに、アンペールの翻訳に対する批評を考察したうえで、オベルタンの翻訳史観が近代フランス翻訳史にどのように位置づけられるか検討したい。

#### A 室 2

### 1840年代におけるショパン、サンド、ミツケヴィチの思想的交錯

—— 幻想曲群と小説との比較から ——

早稲田大学 松尾梨沙

1839年、サンドは『幻想的戯曲に関する試論』でミツケヴィチの詩劇『父祖の祭』第3部を評価し、ショパンはこれに感銘を受けた。ショパンが自ら「幻想」と見做した独奏曲 Op.44、49、61を作曲したのはこの後であったことから、彼らの「幻想」概念がこの三曲の創作に影響を及ぼした可能性を考え、発表者は『試論』の評を踏まえつつ、同年出版された彼女の神秘主義小説『スピリディオン』と、『父祖の祭』第3部とを比較分析し、それがショパンの上記三曲と関連性があることを「東京支部研究報告」で論じた。注目すべきは、Op.44とOp.49は1841年に立て続けに書かれたのに対し、Op.61は1846年に書かれた点である。この5年の間に三者の関係は徐々に悪化しており、発表者はここに三者の政治 思想的齟齬が生じていたと

見ている。サンドは1839年に『スピリディオン』と『竖琴の七弦』を出版したが、これらは精神面で『父祖の祭』第3部に多くの共通点を持つのに対し、1846年出版の『魔の沼』はショパンに捧げられ、この小説に見られる死生観や社会への視線は、39年の小説に見られた「幻想」概念からの変化を示しうる。

以上を踏まえ、ショパンとサンドが聴講したミツケヴィチの40年代のスラヴ文学講義(そこで詩人は自身が傾倒した神秘思想に基づきポーランド人の戦闘を煽っていた)を参照しつつ、41～46年のサンドの社会・宗教思想を追い、それがショパンの各幻想曲へどう影響したか検証することで、当時の社会に対する芸術家たちの葛藤を浮かび上がらせる。

## 漱石『文学論』における「同感」(sympathy)の概念を巡って —— ランドーとテニソンの「ゴダイヴァ」を題材とする作品の修辞を中心に ——

上智大学(院) 福島君子

夏目漱石(1867-1916)は『文学論』(1907)で文学の内容となる人間の「内部心理作用」をフランスの心理学者リボー(Theodule-Armand Ribot, 1839-1916)の*The Psychology of the Emotions*(1897)の分類に従って、恐怖・怒・同感・自己観念・男女的本能等と記した。この内、「同感」(sympathy)については「sym = together」「pathy = feeling」とし「他人と感情を共にするの義」とした。本発表で「同感」を取り上げるのは、それが「他人と感情を共に」できずに苦悩する人々を描き続けた漱石文学の重要なテーマだからである。

漱石は「同感」の文例として、ランドー(Walter Savage Landor, 1775-1864)の散文「レオフリックとゴダイヴァ」('Leofric and Godiva', *Imaginary*

*Conversations*, 1824-1829)とテニソン(Alfred Tennyson, 1809-1892)の詩「ゴダイヴァ」('Godiva', *Poems*, 1842)を引用した。共に若き領主夫人ゴダイヴァが重税に苦しむ領民に示す「同感」を描く場面である。

本発表ではこの文例を、先行研究では触れられていない修辞法「プロソポペイア」の観点から考察する。この修辞法が「他人と感情を共にする」上記二作品で「同感」の情をいかに喚起するかを明らかにしたい。また「同感」が漱石作品の修辞や内容とどう関わるかについても考えていきたい。

## 「トカトントン」における太宰治の『マクベス』受容

専修大学(非常勤) 宮澤信彦

本論では、太宰治(1909-1948)の書簡体小説「トカトントン」(初出:『群像』1947年新年号)におけるWilliam Shakespeare(1564-1616)の*Macbeth*(1605-06)受容を、伝記的事実による裏付けと両テキストの比較分析の両面から論証する。旧制弘前高等学校在学時に太宰が『マクベス』を受容したことは、随想「音に就いて」(初出:『早稲田大学新聞』第60号、1937年、改訂版:『太宰治随想集』、1948年)から明らかである。その事実を踏まえて、日本文学あるいは病跡学の論考においては単に復員兵・保知勇二郎(c.1921-没年不詳)の「手紙にあつたトンカチの音」に着想を得て書かれた小品として論じられてきた「トカトントン」に比較文学の視点からシェイクスピア受容という新しい光を投げかける。

具体的には、まず、太宰の高等学校在学時からの

シェイクスピア受容について、戸澤正保(姑射)(1873-1955)と國枝俊文(生年不詳-c.1938)、両教授と太宰の近い関係性に着眼して論じる。次に、1936年の東京武蔵野病院入院と前後する太宰の幻聴などの実体験が、『マクベス』の劇テキスト内の幻覚の表象を正確に理解し、それに倣い「トカトントン」の作品テキストの有機的な構造を構築する一助となった点を指摘する。そして最後に、戦争トラウマという設定の類似性、幻聴の作品テキスト内での表象の符合、「待つ」(初出:『女性』、1942年)などにも通底する人間存在の本質は主観的幻想であるという主題の同一性、「マタイによる福音書」の間テキスト性など、両テキストの比較分析により、太宰が『マクベス』から種々の着想を得て「トカトントン」を創作したことを論証する。

## 「対立」と「協力」との交錯

—— 池田みち子「国際都市」における経済統制下の日本人「小商人」の表象 ——

筑波大学（院） 蔡夢慧

第二次上海事変（1937）から敗戦まで日本は上海を軍事支配下におき、経済統制や文化工作などを実施した。戦時の上海表象をめぐっては、日本の上海占領政策や汪兆銘政権に関与した男性作家に研究が集中してきた一方、田村俊子を例外として、女性作家に関する研究の蓄積は多くない。

上記の状況を踏まえ、『三田文学』特派員（1938-1939）・旅行者（1940-1941）として、上海に2回滞在した女性作家池田みち子（1914-2008）に着目する。池田は戦時上海を素材とした十数編の小説・随筆「上海もの」を1940年から1944年まで『三田文学』に発表し、日本占領下にあった上海での中国人、無国籍者や日本人一般民衆の生活実態を作品に織り込んだ。しかし従来の研究は個別の作品の紹介にとどまり、池

田の作品の背景にある広い社会的な文脈を読み解こうとする作品精読は見られない。本発表では池田が「本領とする上海ものの総決算」と評された「国際都市」（『日本小説』1949年1月号、初出：「邦人商社」『三田文学』1944年3月号）を取り上げる。新聞社特派員から商人に転身した男性中心人物に注目し、経済統制に翻弄されながら商機を掴もうとあがく日本人「小商人」の描かれ方を分析し、彼と国策会社、大財閥、現地の中国人やロシア人との、ときに「対立」し、ときに「協力」しあう複雑な関係性を読解する。国の支えを得ずに上海で暗躍した日本人「小商人」の有り様を焦点化し考察することで、戦時上海の実態を見直す。

## 日中近代文学における珈琲店「女給」の表象

フェリス女学院大学（非常勤） 邱月

本発表は、日中近代文学に描かれた公共空間としての珈琲店（日本では主に「カフェ」）に焦点を当て、文学作品に映し出された珈琲店における女性、とりわけ「女給」の表象を中心的に分析しようとするものである。1920年代以降、珈琲店の「女給」という職業婦人の登場に伴い、「女給」を題材とする文学作品は日中双方で数多く現れたが、比較文学・比較文化の視座から、それらを系統的に整理・考察する試みはほぼなされていない。

まず、谷崎潤一郎『痴人の愛』（改造社、1925年）、広津和郎『女給・小夜子の巻』（中央公論社、1931年）、松崎天民『銀座』（銀ぶらガイド社、1927年）などの作品を取り上げ、1920年代銀座エンサイクロペディアと言える、安藤更生『銀座細見』（春陽堂、1931年）

と繋げて考察することによって、「女給」の表象・描写の位相を究明する。次にそれを、田漢「咖啡店之一夜」（『創作季刊』、1922年）、温梓川「咖啡店的侍女」（『咖啡店的侍女』、1930年）など、近代中国文学作品における珈琲店の女性の表象や描写法と比較検討する。

珈琲店という西洋文化の象徴たる公共空間における「女給」という群像は、日中の近代文学作品の中でいかに表現され、そこにいかなる類似や相違があったのかを、日中モダニズム文化の諸相との関わりも含めて究明していきたい。

## ブラジル俳句文化の再創造と新展開

— 1300年にわたる日本詩歌史に照らしつつ —

愛知県立大学（名誉教授） 久富木原玲

ブラジルの俳句受容には世界的にも稀に見る多様性が認められる。①日本語俳句②ポルトガル語ハイカイ③季語と5／7／5シラブルを組み込んだポルトガル語ハイカイの3種類の俳句が存在するからである。さらにポルトガル語ハイカイにおいては、しばしば作品に絵が付され、最近では日本近世の俳句を都市の路上でパフォーマンスによって表現する実験的な試みも現われた。ブラジルにおけるこのようなラディカルな俳句受容は日本古代の和歌表現に見られる特質を想起させる。そもそも「俳句」の語源は1100年前の『古今集』「誹諧歌」に求められるが、そこには豊かな身体表現があった。それは1300年前の『万葉集』巻16「戯咲」歌に一層、先鋭的に発現する。そこには民謡などの労働歌に端を発し祭や宴席で歌われたとおぼしい身体の

動きや「声」を彷彿とさせる歌が散見される。ところが平安時代以降の和歌史は、こうした生身の身体を感じさせる要素を捨象していく。一方で和歌史から排除された表現は「誹諧の連歌」・「誹諧」という中世・近世を代表するジャンルを形成して「今・ここ」を現す生き生きとした詩歌史を築いていく。このような日本詩歌史に照らす時、ブラジルの俳句受容は日本詩歌のルーツを想起させ、斬新で創造的な俳句文化を呈する。ブラジルでなぜ、このような営為が可能になったのか、この点についても考える機会としたい。

### 【講演】

#### 石牟礼道子文学と音の世界

元清泉女子大学教授 ブルース・アレン

司会 清泉女子大学 和田桂子

本講演では、石牟礼道子の作品を翻訳した経験を踏まえて、氏の文学に存在する音の世界と口承の伝統について論じたいと思います。口承の伝統を現代文学の世界に広めた現代の語り部としての石牟礼道子氏の役割に焦点を当てます。

また、石牟礼氏の作品を、いわゆる「環境作家」という、狭い範囲で評価するのではなく、現代世界文学の先駆的な大作家の作品として捉え直すという新たな視点で紹介いたします。石牟礼道子は、小説、歴史小説、フィクションとノンフィクションを組み合わせたジャンル混合、エッセイ、詩、能、童話、自伝など、幅広いジャンルの文学作品を50冊以上出版しました。また、多くの著名な日本の作家に石牟礼道子が与えた影響は測り知れません。

石牟礼氏と出会い、そして彼女の作品を読み、翻訳の難しさに立ち向かうことで、私の文学の読み方と理解は大きく変わり、広がりました。この過程を通して、私は「耳の読者」と「耳の翻訳者」になりました。それは、石牟礼の作品が音の世界と物語の口承の伝統に深く根ざしていることを理解するようになったからです。氏が創造する音の世界こそが彼女の文学的想像力の基盤であり、彼女



はそれを現代の文学ジャンルへと変容させました。また、現代の印刷メディアによって口承の伝統を保存し、刷新するのに貢献した他の作家との関係から、石牟礼の作品についても考えたいと思います。

私が翻訳した彼女の3つの作品、小説『天湖』、歴史小説『春の城』、そして能『不知火』を例に挙げて、石牟礼氏の作品を考察します。また、彼女の中心的な関心である「言霊」、つまり言葉の普遍的な精神を考慮しながら、彼女の著作と生涯の仕事についても考察します。石牟礼氏の生涯と作品を描いたドキュメンタリー映画『花の億土へ』より、今まで私が述べた彼女の基本的な考えが見受けられる部分を抜粋して紹介します。

## 【シンポジウム】

### 比較文学とエコクリティシズム

——〈汚染〉をめぐる多文化的対話——

司会・講師：東洋大学 信岡朝子

講師：日本大学 安元隆子

講師：筑波大学 五月女颯

1990年代頃から活発化したエコクリティシズムは、現在では文芸批評の一分野として定着した感がある。その一方でエコクリティシズムの議論は、「エコ」にまつわる方向性の異なる理念や運動、主義主張を雑多に巻き込みながら、生態系、人類、種、人新世といった大きな概念のもと、極端な抽象化・普遍化が進む傾向もみられる。エコクリティシズムが焦点化する〈汚染〉というテーマも例外ではなく、世界各地で進行する人類「普遍」の問題として、「地球」規模の連帯を強調するような論調が一部では根強い。

しかし汚染をめぐる局所的かつ複雑な利害関係や、階級・職業・文化などと結びついた複数の価値基準の相克、さらには汚染をめぐる表象に見られる恣意性や政治性などの問題は、環境保全へのグローバルな取り組みが求められる時代に、より一層意識されるべきであろう。こうした前提を踏まえて本シンポジウムでは、比較文学が研究上の柱とする異文化遭遇、多文化性、他者理解といった観点から、個別の研究事例を通じて、エコクリティシズムの領域にいかなる貢献ができるのかを検討する。

### エコクリティシズムの可能性と限界

—— 汚染をめぐる〈当事者〉と多重周縁性 ——

東洋大学 信岡朝子

W・ユージン・スミスの写真集 Minamata の後半部は、妻アイリーンが主にまとめたカナダ先住民の水銀汚染に関するエピソードが挿入されている。一見唐突にも思えるこのセクションは、1970年代以降、「地球」規模で環境保護主義が語られるようになる傾向とリンクしている。地球＝惑星 (planet) という視点は、人類のグローバルな連帯という新たな想像力をもたらす一方、汚染の問題をある種の具体性のない象徴へと抽象化し、多様な地域や立場にある人々が個々に抱えるコンテクストへの注目を阻害する作用も持つ。本論は、欧米的な環境主義の影響下で、先住民と呼ばれる人々

が経験する多重周縁者としての困難を概観すると共に、日本の熊本水俣病〈当事者〉が直面する自己規定の複雑さについても言及し、汚染の表象をめぐる諸問題について多角的に検討する。

## 核と環境汚染

—— セミパラチンスク・チェルノブイリ・フクシマ ——

日本大学 安元隆子

冷戦下、カザフスタンのセミパラチンスクで行われた核実験の威力は広島原爆の約 2500 倍と言われる。核実験場付近の人々は危険を知らされないまま実験台として村に残され、その放射能被害は今も続いている。この核実験場を閉鎖させたオルジャフ・スレイメノフらのネバダ・セミパラチンスク運動の意義と、運動のシンボルとなった歌「Zaman-ai」の言葉に込められたカザフの民の汚染された大地への想いを検証する。そして、福島第一原発事故を「核災」と呼んだ若松丈太郎、事故後の日本を訪れ「この国には抵抗の文化がない」と評したスベトラーナ・アレクシエーヴィチ、福島原発事故と水俣病の相似を指摘したアイリーン・美緒子・スミスの言葉などを取り上げ、人々がいかに核による環境汚染に対峙してきたのかを追う。

## 毒を喰らわば

—— 立松和平『毒』と石牟礼道子『苦海浄土』の汚染表象 ——

筑波大学 五月女颯

環境汚染の文学的表象についての論考はエコクリティシズムの重要な課題であり、その日本文学への導入と応用が本格化した 1990 年代より、石牟礼道子『苦海浄土』は中心的に研究されてきた作品の一つである。他方、日本公害史の原点ともいえる足尾鉍毒事件を題材とする文学作品を扱った研究は、非常に限定的である。そこで本発表では、立松和平の小説『毒——風聞・田中正造』を中心に、『苦海浄土』やその先行研究での議論を参照しつつ論ずることで、同事件文学の研究の端緒を拓きたい。なかでも、両作品で描かれる、汚染された食物を食べるというモチーフに着目することで、環境汚染と貧困の主題を描写する際の作家の戦略を分析・理論化する。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 145 号

発行人：宗形 賢二（支部長代行）

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名 正博

委員：岩下 弘史 亀井 伸治 越野 剛 庄子 ひとみ 鈴木 美穂

中垣 恒太郎

事務局 事務局長：宗形 賢二 会計担当：土田 久美子

事務局委員：小泉 泉 芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒411-8588

静岡県三島市文教町 1-9-18

日本大学国際関係学部

三島駅北口校舎 607研究室(宗形賢二)

TEL：055-980-1924

E-mail: hikaku.tokyo@gmail.com